

## 「Japan Review 編集長の務め」

国際日本文化研究センター ジョン・グリーン

ただいまご紹介をいただきましたジョン・グリーンです。よろしくお願いいたします。Japan Reviewは国際日本文化研究センター（以下、日文研）が30年前の創立以来、年に1回刊行してきた査読付きの英文学術雑誌です。私は2009年からこの編集長を務めてまいりました。暗中模索の楽しい、時折、多少つらい9年でした。今日のセミナーのテーマ、「学術情報の国際発信力の強化」はまさに私が編集長として9年間葛藤してきた課題であり、この雑誌の存在をどうやってアピールすればよいのかという意味の問いかけだと解釈します。この問いかけに直接答えるのはなかなか難しいので、今日は私の体験談をもって、間接的にお答えいたします。

先ほどのご紹介にもありましたように、私は日文研の専任教員で、今、入試委員長を務めており、その他、数多くの委員会にも入っています。大学院生の指導もしています。また書籍、論文などの学術的業績ももちろん期待されています。Japan Reviewの編集はそういった営みのかたわらです。9年前からこの仕事をやらせてもらっているということは、Japan Reviewの編集体制には欠かせない、継続性があるということです。学術雑誌を引っ張っていくうえでは、この継続性は欠かせないものだと確信しています。

編集体制は、ここのスライドにも図式化してみましたが、私のほかに出版編集室の事務の方が2人います。縁の下の力持ちの2人です。初校、再校、三校の作成、原稿全体の文体の最終チェック、印刷会社、デザインなどの連絡などは彼女らに任せきりです。そして所内の先生方3名で構成する編集委員会があります。この委員会は正直言って、事情があつて機能しないものです。そのほか世界各地で活躍中の日本研究者15名からなるインターナショナル・アドバイザーボード（以下、IAB）があります。彼らに頻繁に連絡をしてアドバイスを伺います。査読のアドバイス、書評のアドバイス、雑誌の軌道修正についてのアドバイス、所内の問題が生じたときのアドバイスなどなどです。また、去年からはコピーエディターを初めて採用しました。以上が、Japan Reviewの編集体制の概略です。

以下、次のような構成の流れで話をしていきたいと思います。まず、編集長の努めとは何かについて語ります。次に、私が9年間編集にあたってぶつかってきた、あるいはぶつかりつつある問題点を、二つほど紹介します。最後に、「脱紀要」という方向性と私が導入したイノベーションをいくつか紹介してみたいと思います。

今日の話は、あまり学術性のないものですが、こういった体験談をたたき台にして議論できるのではないかと期待したいと思います。

### I 編集長の務めとはなにか？

投稿原稿は執筆者から舞い込んできます。紙媒体は原則として受けつけないため、Wordの添付

ファイルでの投稿となります。お礼のメールを送信してから、原稿を開いて読みます。読みながら適切な査読候補者を考えますが、最終的には、IABに推薦してもらうことが多いです。その後、推薦された候補者にメールにて査読を依頼します。依頼する際には、原稿、報告用紙、振込依頼書を添付します。2万円の謝礼を支払いますので、断られることはまずありません。

査読は外部研究者2人に依頼します。査読候補者の了解を得たら、査読報告の提出締め切りについて交渉します。査読は平均、2、3カ月でお願いします。*Japan Review*の場合は査読者を万能とみなしますので、原稿を掲載してもいいと言われたら、掲載します。だめだと言われたら掲載しません。査読報告は二つとも、私のところに届けば、名前だけを伏せて、そのまま執筆者に回します。この際、私もコメントを申し添えます。却下された原稿に関しては理由を自分なりに優しく説明します。採択されたものはおめでとうと伝えたいえ、査読報告や私のコメント、レスポンスを伺います。

編集長の本格的な仕事は採択された時点から始まります。最も明快で優れた論文でも、査読者も編集長の私も必ずといっていいぐらい注文をつけます。私はうるさい編集長という評判です。原稿を何度も綿密周到に読み、序説、結論の書き方、論文全体の構成、議論の展開、論旨の明快さ、文体、脚注のつけ方、参考文献の掲げ方などについても口出しをします。それは執筆者自身のため、読者のため、そして*Japan Review*のために最善の原稿に磨いていく過程でもあります。「俺の文章に手をつけるな」と威嚇されたことはこれまで2回しかありません。原稿の推敲を巡る私と執筆者とのやり取りは、数カ月にわたるプロセスです。3年かかったケースもありました。

いずれにしても申し分のない原稿ができれば外部のコピーエディターに回します。コピーエディターのチェック済み原稿をベースに初校を作ります。初校もコピーエディターに見てもらいます。二校までは執筆者に回しますが、三校は編集長の私だけが見ます。出版編集室のスタッフも丁寧に原稿を読んでくれます。外部のコピーエディターは去年から採用しています。編集過程がそのぶんだけ長引いてしまって、私の仕事も増えた気もしますが、よりよい、ミスが少ない最終原稿となることは間違いありません。私の務めはこのようにして原稿を繰り返し、周到綿密に読むほか、執筆者、IABのメンバー、査読者、コピーエディター、出版編集室の方々とコミュニケーションを常に取ることです。

なお、*Japan Review*では1号あたり9本程度の論文を載せるほか、10~12本の書評も掲載しています。書籍の出版社、書評者とのコミュニケーションも私の仕事です。

以上が、通常号における私の編集長としての務めの概略です。そのほかにも2年に1回の割合で特集号も出しています。平均12本もの論文からなる特集号の場合は、ゲストエディターに仕事を委託・委任するので、そのぶんだけ私の負担は少し軽く感じます。

## II 編集にあたっての問題点

### 1. 質の良い論文を集めるために

次に、編集にあたっての問題点に移ります。私が編集長を引き受けて、ぶつかった一番の問題点は、ほかでもない十分な数の、質の優れた投稿原稿が集まらないことです。1年に12～13本の原稿が寄稿され、うち8、9本を掲載しますが、原稿の採択率が高すぎます。本来なら倍以上の投稿論文が欲しいです。

ではなぜ集まらないのか——。いまだにはっきりわかりません。宣伝が足りなくて、存在感がまだ薄い。はっきりしたアイデンティティがまだできていない。優れた、先駆的で独創的な学術論文の数が少ない。所内の紀要というイメージがまだ強い。日文研は保守主義の温床でかわりたくない・・・などなど、考えられます。はっきりした答えはまだ出ないので、よりよい知名度の高い雑誌に育てていく営みは、実に時間がかかるものだとつくづく思います。

投稿論文の数を増やそうといういろいろ工夫して頑張っているつもりです。国内海外の学会、ワークショップなどに出かけ *Japan Review* の最新号を名刺がわりに配り、原稿を積極的に募ります。こうして集めた原稿はかなりの数になります。また、チラシも学会の場で配ります。こちらは、最近作ったチラシです。また、AAS (Association of Asian Studies) などの学会のプログラムにも広告を掲載します。こちらは、今年ワシントンで開催される AAS のプログラムに掲載する広告です。なお、今年はロンドン、サンフランシスコ、ワシントン、シンガポール、ウィーンで開催予定のイベントでこうした広報活動を私が行う予定です。European Association for Japanese Studies のサイトなどでも広報を行い、原稿を募集しますし、日文研のサイトでも原稿を募集しています。

*Japan Review* の IAB の先生方にも宣伝と原稿探しを依頼しています。日文研在籍の外国人研究員も実は論文を投稿する義務はあるのですが、その義務を強要することは不可能に近く、その結果、投稿しない研究員は多いです。日文研の所内の先生方にも原稿を投稿するように声をかけています。ただほとんど投稿してくれません。30名の専任教員がいる中、近年2名からしか原稿をいただけていません。*Japan Review* の査読は厳しいから、却下されるかもしれない、それが嫌だから、と断られたこともあります。これは非常に残念です。

しかし、別の見方もできます。私が知っている韓国、中国、台湾などの研究者は、英語で論文を出すようにと大変な圧力をかけられています。英語で論文を出さないと評価されない。論文の質はどうしてもよい、とにかく英語で出せというのがアジアの文化圏、研究所の一つの傾向らしいです。幸か不幸か、日文研の教員は英語で論文を出す義務は全くありません。その義務があったならば *Japan Review* への投稿論文の数はもっと増えるに違いありませんが、それでは *Japan Review* はいつまでも紀要のイメージを吹っ飛ばすことが結局はできないであろうとも考えられます。要は優れた原稿を集める努力がまだまだ足りない。私の努力が足りないと考えています。

## 2. コストの問題

次の問題点です。*Japan Review* は日文研の顔であるという認識が、日文研の執行部にあります。国際日本文化研究センターの国際性はまさに *Japan Review* の存在によって証明されています。そのため日文研は十分な資金を *Japan Review* の制作やその宣伝に注ぎ込んできました。

非常にありがたい話です。

そこでこのスライドを見ていただきたいのです。 *Japan Review* の予算関係のものを表現したものです。まず、これを見れば予算がおおよそわかるかと思います。毎号の印刷、製本費に XXX 万円を割いています。2,200 部も刷るコストです。コピーエディティングの発注は去年導入した新しい展開ですが、それに XXX 万円を費やします。DTP 編集発注は、XXX 万円の予算を占めています。装丁デザインなどは XXX 万円程度です。小計 XXX 万円前後です。そのほかに論文査読報告の執筆者と書評の執筆者に謝礼を払います。査読報告一つにつき XXX 万円、書評一つにつき XXX 万円が今の相場です。以上は通常号の予算です。人件費はもちろん入っていません。 *Japan Review* を世界中の大学、研究機関に送付する郵送料もこれとまた別に予算化してあります。

問題とは、この予算がこれから大幅に削られる見込みという点です。どこの大学、研究所でも同じ経験、同じ目に遭っているようです。それが問題で、現状維持はほぼ不可能だと考えています。そこで何を犠牲にしたらいいのか。選択肢はいろいろあるかと思います。紙媒体をやめてオンラインのみとする、刷る部数を大幅に減らす、より安くて質の悪い紙を使用する、カラー図版をやめて白黒だけにする、査読報告、書評の原稿料の支払いをやめる、2年に1回程度で刊行する特集号をやめる、などなどの選択肢はあります。今日ここにお集まりの皆さんと、予算問題などについて腹藏ない意見交換をぜひ行いたいと考えています。

### Ⅲイノベーション——脱紀要を目指して

そこで第3節に入ります。創刊当時の *Japan Review* と今の *Japan Review* とは見間違えるほどに変貌してきました。変貌の大きな一方向性は脱紀要です。 *Japan Review* は過去にはまぎれもない紀要でした。紀要とはいろいろ定義づけはあるかと思いますが、勝手に定義づけてみますと、所内の教員なら誰でもどんな論文でも特権的に掲載できる雑誌のこと。論文のほかに講演録、会議の記録、報告書、対談などを載せる雑誌のこと。それから外部の者の投稿を歓迎しない雑誌のことです。 *Japan Review* は過去にはそういう性格づけの雑誌でした。しかし私の前任者が10年もかけて *Japan Review* を紀要でなくするところに、大変な努力を払ってきました。私は前任者の遺産を踏まえて、さらなるイノベーションを少しずつながら導入してきました。これについて最後に簡単に紹介してみたいと思います。これから言及するイノベーションとは、脱紀要の完成と欧米の学会における存在感の向上、雑誌全体の質の向上を目指したものです。

#### 装丁、タイトルなど

まず、着任したときに雑誌の装丁を変えてみました。光沢のある黄色と緑の、正直言って醜い模様の装丁を、光沢のないものにし、毎号、日文研のデータベースから画像を選び、その表紙に掲げてみました。そして雑誌のタイトルも *Nichibunken Japan Review* から、ただの *Japan Review* に変えてみました。紙やフォントも変えました。

### 和文要旨の廃止

見た目が悪く、不要な論文の和文要旨も省きました。

### 文末注から脚注へ

使いにくい文末注を脚注にしました。

### カラー図版

執筆者に図版を、しかも必要に応じてカラーの図版を積極的に使うように促す方針を取ってみました。これは一つには、最近では多くの学者が画像資料を使っているのに画像資料を掲載できるだけの予算を持つ学術雑誌はなかなか少ないですが、そこに *Japan Review* をアピールする一つの契機があるかと考えたためです。

### 書評コーナーの新設

また、書評コーナーも設けました。読みたい論文がなくても、読みたい書評はきっとあるだろうという計算です。書評はとりわけ大学院生や若手の研究者に依頼することにしています。

### 特集号の開始

さらに *Japan Review* 特集号という企画も始めました。特集号もやはり読者層を拡大し、雑誌全体の認知度の向上に寄与すると考えています。1回目は春画の特集号でかなり注目を浴びました。この特集号は実は他の学術雑誌で書籍として取り上げられた程で、その次に出した日本の世俗の特集号についてももうすぐ書評が出ます。3回目の特集号は戦争とツーリズムの特集号で、今年の年末に刊行する予定です。

### JSTOR への登録

JSTOR というデジタルアーカイブに *Japan Review* を登録しました。これは *Japan Review* のグローバルアクセスを可能にする欠かせない戦略だと考えていました。今後の大きな課題としては、Web of Science に *Japan Review* を登録することもあります。

### スタイルガイド

最後にイノベーションとして導入したものは *Japan Review* スタイルガイドです。れっきとした欧米の学術雑誌は皆シカゴスタイルをベースにしたスタイルガイド、一種の執筆要項ですね、それを必ず持っていますが、これまでは *Japan Review* は持っていませんでした。 *Monumenta Nipponica* という雑誌のスタイルガイドを借用する、という恥ずかしい時代でした。今年の4月1日からは *Japan Review* 独自のものをサイトにアップして使い始めます。

結論というほどの結論ありませんが、終わりに近づいてまいりました。

以上が、*Japan Review*の脱紀要、換言すれば知名度の向上、全体の質の向上を目指したイノベーションの数々です。それは言うまでもなく日文研の応援、とりわけ出版編集室のスタッフの応援がなければとてもできなかったわけです。ただこれをみんな、成功とみなしていいかどうか、大いに疑問に思います。なぜなら投稿原稿がまだまだ集まらないからです。今日のセミナーのテーマに引きつけて言い直すなら、学術情報の国際発信力をどう強化したらよいか、はっきりわからないままにいるからです。以上です。